

教師、広瀬淡窓について（その1）

米山 弘（児童学科・教授）

はじめに

広瀬淡窓と言えば日本の近世教育史上、江戸後期、九州・豊後日田の地に私塾「咸宜園」を創設し、漢学塾として全国から延べ4617人もの塾生を集めた人である。

言うまでもなく、今日のような交通機関も通信設備もなく、況んや九州でも一番寒い山間の学問所に、よくも多くの青年を学問教授し、人間教育まで行った教育機関が出現したものであると驚きを禁じ得ない。しかもこの偉大な教育業績を成し遂げた広瀬淡窓という人は、生まれた家庭環境こそ裕福で、社会的な地位教養は当時としては、この上なく恵まれていた人といえるが、淡窓自身の健康はきわめて病弱で、長男として生まれながら、幼少時代から早くも成人になるまで持たないだろうなどと言われていたのである。ところが、本人（幼名、寅之助）はこと勉学にかけては実に優れて父や伯父の俳諧、漢詩のこととなると素読や詩作に長けて、当時、たまたま逗留の晩年の高野長英を驚かせたというのである。

本人も病弱を自覚し、福岡の亀井塾での修行半ばで帰郷するや、やがて仲間と長福寺学寮で勉学をはじめ、学問教育を続けていく。

本稿では、淡窓の幼少時代から塾立ち上げ、また主な出来事を時代を追って見つつ、淡窓に協力した周囲の人々との関係をも取り入れて述べてみた。よく知られている咸宜園塾^{かんぎ}の教育の具体的方針として有名な「三奪の法」「月旦評」、また塾生たちの学習の模様等については、次回に回したことをお断りしておきたい。

（参考文献・資料一覧等）

- ①、『増補 淡窓全集』全3巻 日田教育会、昭和46年刊
- ②、『廣瀬淡窓・細井平洲』後藤（解説）玉川大刊 昭和43年
- ③、『広瀬淡窓・広瀬旭莊』日本の思想家35 明德出版、昭53年
- ④、『淡窓先生』大久保（著）日田教育委員会刊 昭56年
- ⑤、『日本教育史』石川松太郎（他著）玉川大、刊 1992年
- ⑥、『「学び」の復権』辻本（著）角川書店、平成11年
- ⑦、『論語』金谷 治（訳注）岩波文庫 1999年 刊 他省略

（※本文中①-1-100は、淡窓全集1巻の100頁を意味する。）

広瀬家と淡窓の幼少時代

広瀬淡窓（天明2年（1782）4月11日～安政3年（1856）11月1日）は、九州、豊後日田の豆田町、広瀬宗家の長男として誕生した。幼名は寅之助と言った。淡窓の生まれた広瀬宗家は、彼の父で五代目となる日田の名家であった。

(*「日田」は、今日の大分県日田市、淡窓の時代に日田は幕府直轄地の天領で、代官が派遣されていた。)

(※淡窓の幼少時代から始まる本文は①-1、②及び④を主に参考にした。)

父は三郎右衛門(俳号「桃秋」と言い、代官所の御用商人で誠実な人柄であったという。母ユイは、筑後吉井の後藤家の出で、15歳の時に広瀬家へ嫁いで、8男3女を設けたが、文化9年(1812)2月に48歳のときに病で亡くなった。

淡窓の父は、実は広瀬宗家の次男であったが、父の兄に当たる平八(俳号「月化」)は、豊後や対馬の藩の御用達にもなった人であったが、専ら俳諧の方に傾倒したので、35歳の時早くも家業を弟、即ち淡窓の父に譲り、自らは広瀬宗家を離れ、堀田村に「秋風庵」を建てて俳人として生活を送った。やがて平八(月化)は『秋風庵発句集』二巻を完成し、この句集によって名声を高めた。後、文政5年(1822)76歳で没した。

(*年齢は全て数え年齢で表した)

(*「秋風庵」は、伯父の月化が堀田村に家を立てて庵とした時、友人から、祝いにと松尾芭蕉の書いた掛け軸「あかあかと 日はつれなくも 秋の風」を贈られ、これがきっかけとなって「秋風庵」としたという。)

父(三郎右衛門)は広瀬宗家を兄の平八に代わって、藩の御用達として家を継いだので、寅之助(淡窓)はこの多忙な父母の元から、伯父である平八の元に2歳から5歳まで預けられて育った。幼少の寅之助は生活に不自由なく、当時としては教養の高い俳人の伯父の家庭で感化され、幸福に育った。

6歳の時に伯父の平八(秋風庵)の所から魚町の父母の元へ戻り、手習い・読書に励むようになった。読書は7歳で、とくに父から『孝教』の素読の手ほどきを受けたのが最初と言われる。8歳では『四書』を、また同年冬には、父ので紹介で長福寺の住職から『詩経』の素読を教えられたが、身内以外では最初の師匠であった。それから寅之助は『春秋』を学び、『蒙求』は読みと意味も習ったのである。(④-9~11頁)

10歳の時、寅之助に転機が訪れた。それは久留米の浪人で、この頃、日田の地に逗留していた松下西洋という若い人物と出会ったことである。西洋には学問があり、詩の才にたけ、日田では代官所に文学の教授のために出入りしていたが、やがて広瀬家に引っ越して来たので、寅之助は西洋から直接に漢詩を習うことになった。一日に七言絶句を一首作り、作り続けて200首以上になると、次に五言律詩へと進んだ。また漢文の文章作りもこの時に学んだといわれる。西洋の下にはやがて、10人ほど門弟が集まったので「会読」という共同学習法が出来た。ここで寅之助の本領が発揮され、『十八史略』で行われた「会読」は、とくに寅之助の才能を磨いたという。(③-225~227頁)

寛政五年(1793)、寅之助少年12歳の時、長福寺での「詩会」に参加しては詩作を磨いていたが、ついに一日に百首の漢詩を作ったという。この時たまたま広瀬宗家を訪問していた高山彦九郎に、そのことが聞こえ、いたく感心させたと言う。また翌年、親しく学んだ松下西洋先生が、豊後の佐伯藩主に招聘されたので、別れることになったが、寅之助にとっては、その後も終生、忘れ難い師の一人となった。

淡窓（寅之助）の幼少年時代は、当時としても裕福で教養の高い家庭環境と優れた人脈に恵まれていた。しかも今日で言う「早教育」に恵まれ、それに応えて漢詩の詩作の才能を見事に開花させたということが出来る。

しかし以上のように極めて恵まれた寅之助ではあったが、一方では寅之助という名前に似合わず、体が弱く、「はしか」にも皮膚病にも罹って、何日も苦しむことがあったのである。そして以後、小痘や風邪に罹り、ときに重病となって周囲の身内を大変に心配させるのであった。彼は一生、病気を友として連れて歩いたのであった。

広瀬家においては、また寅之助12歳の頃に祖父の広瀬久兵衛が高齢で亡くなったが、祖父は、人助けや奉仕好きの情け深い人柄で家業にも熱心だったが、早く長男平八に仕事を譲って、その後、隠居で過ごした人であった。祖父はこれとあって、学問も詩の心得もなかったが、家の者には常に「心高身低」（心は高く、身は低くすべきもの）と言って戒めていた。これがやがて広瀬家の教えとなって寅之助や家の者に染み込んでいったのである。

亀井塾への入塾

寅之助は16歳のとき（寛政九年、1797）に、藤 左仲の紹介で福岡の亀井南冥の塾に入門した。藤 左仲は亀井南冥の弟子で、詩書に優れ、弁才に長けていた。前年に彼は日田に滞在していた。以前から寅之助の父も、亀井南冥には共感しており、左仲が南冥とその子息昭陽に対して賞賛していたので、父は寅之助の入門に大いに賛成であった。そこで早速、左仲は寅之助を案内して福岡まで出掛けたのである。まず、子息の昭陽には会ったが、南冥には会えなかった。この時、南冥は酒で失敗し蟄居の身であったので、他国の者には会えない状態だった。仕方なく、この年、二人はひとまず、日田へ戻った。そして翌年に、寅之助は再度、左仲に従って亀井塾へ向かったのである。ところが亀井塾はまだ、他国者を入塾させなかったのである。（①-1-95）

そこで左仲は一計を案じて、知り合いの村医者、内山玄斐を訪ね、内山に、是非にも頼んで寅之助を仮の養子にしてもらったという。寅之助は今や、内山玄簡（うちやまげんかん）を名乗って、漸く亀井塾へ入門することができた。

亀井家は福岡の唐人町にあった。当時としては、亀井家のその塾は大きく、全盛時代には六十人余りの塾生が学んでいた。だが、玄簡こと寅之助が入門の際には、門人は二十人程で、この中で、やがて寅之助と親交のできた仲間は七人くらいいたという。

玄簡（寅之助）は、詩の指導は南冥に、昭陽からは文を学んで、大きな成長をした。南冥も、ある弟子の送別に当たって作らせた門人たちの詩の中から、玄簡の優れた詩を見て、大変に褒め称えたと言う。（③-229～230頁）

亀井塾は、塾生が学ぶ所としてはかなり自由を許していた。換言すると、塾には学問に励む者に対する生活の規則には厳しさがなかった。そのため、塾生の中には福岡の町へ出掛け遊興にふける者も出て、退塾勧告が下った塾生がいたが、このことは後年、淡窓が塾の経営に当たって、塾生には生活の約束や規則の必要なことを教えるものだった。

玄簡（寅之助）は、遙か日田を離れた福岡の地で塾生活にも慣れたころ、郷里の父が心配し

た通り、ついに風邪を拗らせてひどい高熱に見舞われた。正月が近づき、仲間の塾生はそれぞれ故郷へ帰省してしまい、彼は塾で一人伏して、寂しく新年を迎えたという。やがて風邪が治り、遅れて彼も郷里の日田へ帰ることが出来た。二月になって、再び帰塾を準備していると、福岡から突然の知らせがあり、「正月の二十九日夜、唐人町からの出火。折からのはげしい風で火災が広がり、亀井塾も瞬く間に全焼した」(①-1-82) というのである。寅之助は急ぎ塾へ戻ると、一面の焼け野原となっていた。そこに南冥、昭陽両師匠がいて、持ち出せた物はわずかで、後はなにもないという。寅之助は、戻った門人たちと後片付けをし、やがて、亀井塾を去ることにした。

玄簡(寅之助)は、塾には足掛け三年滞在したが、18歳の十二月、ついに日田に帰省したが、彼の心は複雑であったに違いない。福岡の大火で亀井塾は続かず、相当の学問力と詩作力を師匠の南冥は評価してくれたが、他方、玄簡(寅之助)は健康に不安を抱えていたので、周囲からも帰郷して保養に努めるよう促され、不本意であったが、駕籠に乗って帰省したのである。

(※淡窓は後に、自叙伝『懐旧楼筆記』の中で、亀井塾の師匠の南冥・昭陽父子について、優れた教育者であり、塾生に長所があれば、それを愛し、短所を非難しなかったこと、教育の指導の術は、師匠の南冥、昭陽父子共に、門下生が学問に発憤して止まないように導く見事な指導であったこと、両人の一言は、常人の千言万語にも勝る物であったと述べている。)

(※亀井塾は、福岡の大火で焼失した。その後、師匠南冥はその三男で医師となった大年と姪ノ浜で共に住み、塾を新しく「甘古堂」と名付け、塾の教育を開始した。)(①-1-97)

養生と家族の心配

19歳(寛政十二年、1800)の新年は日田の郷里で迎えたが、寅之助は病の養生の身であった。彼は、天に祈って助けを請う詩作もしている。正月なので友人が訪ねて来て、夜遅くまで語り、家人に夜食を勧められて食したが、これがまたむかつき、頭痛、目眩とひどく襲って来て、家人を大変に慌てさせたりした。伯父の月化も「秋風庵で養生しなさい」と勧めてくれたので、二月になって寅之助は庵に移り、養生に努めた。そして漸く病氣回復の兆しが少し見えた。しかし、またいつ重篤状態になるか予想がつかなかったのである。医者も常時四人が付添いで見てくれたが、病氣の原因が何か少しも分からず、どんな薬も効かなかったという。

(※寅之助が病氣全快を祈って詩作したといわれる二首、「人世の夭寿定まるは何によってぞ。」
「須く識るべし皇天は善人にさいわいするを。」)(①-1-197))

寅之助の伯母と妹の有(アリ)(後に、秋子=ときこ)も看護に専心従事してくれたが、一向に快方に向かわず心配が深まった。多くの見舞客の訪問もあったが、当時、日田に肥後(熊本)の医師の倉重 湊が逗留していたので、寅之助の父はこの人に診察を頼んだ。倉重は寅之助の秀才ぶりを知っていたので、引き受けて熱心に診察したという。彼は、手当の方法や薬と灸治療の効果を的確につかみ、やがて、病氣の進行を止め、寅之助を確実に次第に快方に向かわせて行ったのである。家人は喜びに沸いた。そしてこの際、玄簡(寅之助)改め「求馬=もとめ」と名前を変えた。「卯の花の咲く頃」に改名したという。(①-1-105~106)

しかしその後も、いつか病氣になりはしないかと不安が付き纏ったのである。20歳のとき、

不安は再び現実となった。おまけにこの頃、日田には麻疹（はしか）が流行し、恐れていた求馬もついに罹ってしまった。苦しむこと半月。漸く、治まってきたが、家人の嘆きは非常なことであった。この時、妹有（アリ）は「兄の身代わりになろう」と密かに「大願」を立てて、寺に詣でて、兄に代わって大願の加護をいただき、戻ったのである。アリは大超寺の豪潮律師（=ごうちょうりっし）の靈感に触れて来たというのである。これを聞いた求馬は強く断ったが、後の祭りであった。（①-1-109～110、118～121）

アリの命がけの大願が通じたのか、兄の長い大病が癒えてきた。そこで、アリは信仰を強め、大願であった「尼僧」になることを決意したのである。しかし、これを知った広瀬家は大変に困った。やがて、これを知った寺の律師は、解決策となる「宮中に仕える」話を切り出した。宮中でいま、仏道を志す友人を求めているというのである。アリの出家の願いと尼僧を望まない広瀬家の思いが共通となったのである。かくて、アリは京へと旅立つこととなった。

当時、日田から遙か遠方の京の宮中に仕えた秋子（=アリ）は確かに、大願が叶って幸せであった。しかし、それに引き替え、兄の求馬に取っては、自分の病のために妹秋子が京の宮中にのぼったのである。その妹がいじらしいと思った。しかしその罪は、元々自分にあると彼は悩んだのであった。（①-1-133～134）

結局、秋子（アリ）は宮中で熱心に仕えたが、それは郷里から誰か身内の者が訪ねて来たり、本人が帰省したりすることもなく、当時としては、生き別れの出来事であったのである。後に、秋子（アリ）は病を得て、回復せず亡くなった（七月十七日）ということである。求馬の嘆きと苦しみが伝わってくるようである。（④-54～56頁）

淡窓の塾開設（学問と教育の悩み）

求馬（=淡窓）は、漸く病気が小康状態となって来たとき、すでに23歳（文化元年、1804）を数えていた。彼は「何を以て身を立てようか」と思い巡らせ、密かに悩んでいたのである。学者か、政治家か、それとも医者かなどと考えたが、どれも実現しそうには思えなかった。とくにこの山間の日田の田舎では、自分の天分を伸ばすことが出来ない。そもそも、この日田で学問を教える身を立てた者は誰もいないと思ひ、求馬（淡窓）は悲観していたのである。（①-1-125～126）

ちょうどこの頃、日田に倉重 湊が来たという。求馬はこの恩人に自分の悩みを手紙で訴えた。返事がないので、直接、滞在している宿舎を訪ねて確かめた。倉重は、求馬の悩みの手紙を読んでいたが、返事を出すまでもないと思っていたのであろう。即座に求馬に向かって、「君の志すべき道は、はじめから決まっている。自分を知らぬにも程がある！」と叱咤し、「学問教授で身を立てるのだ」と迫った。求馬は「この日田では無理である」というと、倉重は「開けぬ、開けぬと誰が決めたか！」と。そして「迷うな！学問教授は君に授かった『天命』ぞ！」と。さすがの淡窓も「はい！」と答えるほどであったという。倉重はさらに「学問教授で身が立たぬなら、その時には死するまでだ・・・」と言った。それで求馬は決心したという。（④-52～53頁）

長福寺学寮の開設

文化二年（1805）三月、24歳の求馬は大きな希望を持って、家を後にして、豆田町の長福寺にあった学寮をかりて、学問所を開設した。ついてきた仲間は二人。17歳の諫山（いさやま）

と12歳の館林（たてばやし）であった。三人で勉学生活が始まったのである。（①-1-129）

長福寺の中の徳善寺の住職である素竜師は、求馬の伯父平八（=月化）の俳句の友人であったので、自分の子ども二人を求馬の弟子にと入門させた。求馬に「天命」と断じて学問教授を勧めた倉重 湊も町を廻って弟子集めの陰の協力者となった。かくて弟子は次第に増加した。（①-1-130）

塾、成章舎（文化二年（1805）、八月～文化四年（1807）五月）の開設

八月になって求馬（淡窓）の学問所が手狭になったので、長福寺から豆田町一丁目の大阪屋林左衛門宅に移った。この転居も倉重の説得によったのである。求馬の門人たちは住みこみで修学が始まった。この場所がまもなく「成章舎」と名づけられた。「成章舎」という名は『論語』公冶長に見える言葉である。ここの「斐然成章」（斐然として章をなす）に見えるが、その意味は「青年のことを織物にたとえて」、「美しい模様を織りなしているが」と言って、続く言葉で、まだ役に立っていないので、どうしたらよいか教えてやろうといった孔子の意気込みの感じられる言葉である。また当時、24歳、青年学徒の求馬（淡窓）の意気込みが強く感じられる塾名でもある。

（*『論語』（公冶長第五、二十二章）の「帰与帰与、吾党之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之也」の中から、塾名の「成章」を取ったのである）

成章舎の開設の頃、恩人の倉重が訪れた。倉重は勉学に集まった若者たちを見ていて、そこに師弟の区別が見えなかったことから、淡窓に助言した。学問を以て身を立てるなら、お互いに単なる勉学朋友の交わりでなく、師弟の関係で接することこそ、塾として成り立つのだと助言したのである。門弟たちも求馬が師となること、先生と呼ばれることに賛成であったので、以後、そうだったが、求馬（淡窓）自身は、自分が人の師となることは畏れ多く感じていて、「人材を教育するは善の大なるものなり」と述べて、生涯に渡って師たることに慎みを持った人であった。（①-1-137）

（*淡窓はまた54歳の時の『告諭』に「人の師となるは容易のことに非ず、・・・」と記している。）

また、後述するが、淡窓がその後の塾経営に成功した重要な教育方針は、この成章舎の時代から実行されている。即ち、「月旦評」であり、また「入門簿」の発端となる入門者への名簿への記名も始まっているのである。（①-1-138）

求馬（淡窓）は成章舎において、教師として学問教授に熱心に励んだ。次第に入門者も増えて行った。成章舎は、大阪屋の家を間借りして、塾舎としていたので、その土蔵部分の求馬の勉強部屋は梅雨時や夏場はひどく凌ぎにくかった。そこで、新たに塾舎を建てることにしたのである。

この時、奇特の援助者がいた。それは新しい塾舎の敷地の持ち主であった伊予屋の手嶋義七が自分の田畑を提供してくれたのである。義七はその上に、塾舎建設の費用の半分を援助してくれた。こうして求馬の念願だった塾舎「桂林園」が文化四年六月（1807）には落成した。じきに求馬は塾生たちを連れて、豆田裏町の新しい二階建て塾舎へ入った。求馬（淡窓）は26歳

であった。

桂林園（文化四年六月（1807）～文化十四年一月（1817））の教育

桂林園が開設されたとき、塾生は二十人を数えた。彼らは互いに「我らが塾」と気持ちを一つにして、塾生活が開始したが、それは塾名「桂林」の名に相応しかった。（①-1-147～148）

桂林園における求馬（淡窓）は、師弟同行、塾生と共に生活し、次の咸宜園塾^{かんぎ}が設立されるまでの十年間、彼の若き日の情熱を全塾生に傾注したのである。「入門簿」が本格的に整えられ、入門する者は、自ら筆を執り、姓名と出身地（郷里）、そして入門の年月日を、後には紹介者の名も記入している。しかし、年齢の高い者や、勉学専らでない者、更に入門してもじきに帰郷する塾不適応者などは「入門簿」に記録していない。この「入門簿」は後述の「月旦評」と共に後々まで続き、淡窓塾の大きな特色をなしている。（③-181頁）

（*日田市の「地域活性化懇話会」作成の「咸宜園門人出身地別人員調」（大正六年七月淡窓図書館調査）によれば、「合計六十四箇国、四千六百壱拾七人」とある。但し、淡窓自身が塾経営し教授した時代に限るなら、直弟子の門弟は式千六百八拾壱人を数える。）

（*また、「入門簿」欄には、入門年月日、住所、氏名、紹介者の順に塾生全員の名簿になっている。）

次に、「桂林園」時代に忘れてはならない規則がある。即ち「入門簿」に記入した入門者は必ず塾の根本的な規則である後述の「三奪の法」（『灯火記聞』卷二）に従って入塾し、修学することである。また、入塾生が増加するに従い、また求馬（淡窓）がときに病にかかって学問教授に携われないでいる時、塾の規則や組織が機能し、充実していなくてはならない。この「桂林園」の時代は、塾教育が如何によく運営出来るか、厳しく細かく配慮されたということである。この塾ではまた、とくに修学の履修課程をシッカリと整えたということである。

なお、求馬（淡窓）は文化七年九月（1810）、29歳で合原ナナと結婚した。ナナ（20歳）はしとやかな性格で、同じ豆田町出身で合原善兵衛の娘であった。（④-71頁）

塾の組織運営については、もし規則や履修課程など細かく厳しいと、学問教授の本質を損なって入塾生は減少してしまう。しかし「桂林園」は、入門者が逆に増加しているのである。このことはいうまでもなく、広瀬淡窓その人の偉大な教育力があつたからであろう。つまりそれは淡窓が教育者であり、詩人や歌人としても門下生に接したからである。塾生たちはまた「詩は学に入りやすし」として淡窓に積極的に倣った。かくて詩集で、後年有名になったのが、淡窓編の塾生たちの作った『宜園百家詩』であった。（④-95頁）

「桂林園」の十年間は、求馬（淡窓）にとっては、塾教育の精神を最も熱心に実践し、体現した時代であつたらう。勿論、病苦も風邪、眼病、脱肛、頭痛、おう吐、小痘、悪寒とあり、塾経営の不安、塾生の諸問題等があるにも拘わらず、塾生の教育修行の良さをその生活に見ていたのである。このことが有名な「桂林莊雜詠示諸生、四首」となつて今日、残つたのである。なお、この詩については後述したい。

（*「桂林園」と詩の題名「桂林莊・・・」は同じだが、前者「桂林園」は『淡窓日記』や『懐旧樓筆記』に見え、「桂林莊」は、『遠詩樓詩抄』に見える）

咸宜園（文化十四年二月（1817）～）の淡窓塾大成

「桂林園」の十年間に身近な人々の内、求馬（淡窓）が29歳のとき松下西洋が亡くなった。また31歳のときには母のユイが病没した。淡窓33歳のとき、恩師亀井南冥師が死去した。34歳のときには、父桃秋が隠居した。こうした出来事は求馬（淡窓）にますます「持敬」の実行を強くしていった。つまり自己の病弱も伴い行動に「慎み」や「戒め」を強くした。（④-79～81頁）

「咸宜園」塾発足のとき、求馬（淡窓）は36歳。堀田村へ二月に転居したが、すでに正月から「桂林園」の塾舎を崩し始めた。というのも、塾生の急激な増加で解体した「桂林園」を移築して使いたかったのである。また長く親しんだ「桂林園」の塾舎への思い入れもあった。さらに「咸宜園」は、すでに年を取った伯父・伯母の住む「秋風庵」の近くに建てて、伯父・伯母の世話をしたかったのである。そして「咸宜園」で淡窓は朝夕の塾生の生活と勉学を見守って、彼らの天分と人間の良さを伸ばしたいという思いがあったのである。（④-82頁、③-167頁、①-1-259）

新しい建て替えの塾は、「咸宜園」（かんぎえん）といった。「咸宜」の名は、中国の古典『詩経』からとった言葉で、「コトゴトクヨロシ」と読むが、ここには淡窓塾が個性天性の尊重する塾であることを意味している。つまり、人は各々長所があるのだから、学問をしたい人は誰でもみな来なさいというのである。先の「三奪の法」と共に、淡窓の塾の精神と学問する自由が、時代の社会の生活の制約を凌駕していく強い力を持っていたのである。（④-83～86頁）

（*咸宜園の塾こそは、淡窓の「いろは歌」にある「鋭くも鈍きも共に捨てがたし、錐と槌とに使い分けなば」が個性尊重を象徴している。）

「咸宜園」の教育的自治の精神

「咸宜園」では、塾生たちは自治的生活を行うために、「月旦評」の級位に応じて、言わば「一人一役」の係が与えられていた。それは責任が伴い、実際の仕事であり、しかも役に立つことだった。塾は共同生活であり、塾生は実践的で役立つ人間の形成が可能であった。

また病気に掛かった者は係活動を免除してもらい、勉学のみするので罰金を払ったという。さらに、級位に応じた係の仕事が勤まらない者には、その仕事が出来るまで月旦評の級は留め置きであった。（④-96頁）

自治生活の係は、無級から始まる係の名称だけでも、次のようになっていた。① 都講は9級8級の者、② 舎長（東塾、西塾）や講堂監には8級7級の者、③ 特別の係として

- 1 主簿（金銭を扱う）の者は7級6級、
- 2 書記（塾の記録）経営監（塾舎の修繕）蔵書監（塾の書物）の者は5級、
- 3 典薬（医薬や手当）の者は6級5級
- 4 履監（履き物）の者は4級3級、
- 5 宿直（夜けい）・日直（日々の当番）は3級2級、
- 6 侍生（先生のそばに仕える）2級1級、
- 7 清掃監（内外の清掃）は無級の者。

自治学習の係は、

- 1 句読師（正確な読みを指導する人）は3級4級、
- 2 新来監（新入生の生活や学習の相談を受け持つ人）は2級、
- 3 童子監（寺子屋あがりの幼少の生徒に親切に指導する人）一級、
- 4 会頭（輪読や輪講や会講など、各学習の先生の代理）6級以上、(④-97～98頁)

塾生の中に、貧しい学生がいた。学費が続かないのである。そこでアルバイトがゆるされた。塾生は早速、頭を丸めて俄の僧になって、お経の一節を覚えた。彼は村々を廻って、読経して資金を得たので一年は勉学が続いたことがあった。

また、天草から来た下川 晋も学費が無く、按摩の仕事に就いた。しかし、風邪をこじらせて命を失った。彼は熱心な篤学の人で四級まで進んでいた。こうした塾生を見るにつけ、淡窓は残念に思い、儉約を強く奨励した。(④-99頁)

大病、そして「求馬」を「淡窓」に改名

「咸宜園」の塾はその後順調に発展していったが、伯父の月化は病を得て、文政五年（1822）の年が明けるとまもなく他界した。76歳であった。また伯父の後を追うように翌年伯母もまた72歳で亡くなった。求馬（淡窓）は41歳になっていたが、彼にとっては尊敬する二人の死は寂しい限りだった。また悪いことに求馬（淡窓）も健康に不調を来たし、次々と重病が襲った。さむ気に下痢に脱肛が始まり、ついに手術が必要になったという。(④-106～109頁)

病気が小康状態になったとき、求馬は、末の弟謙吉に相談の結果、養子になってもらうことにした。弟は17歳で、求馬とは25年の違いがあったが、優秀な人物で、秀才ぶりはよく知られた。のちに「旭莊」と名乗り、咸宜園の二代目の師匠となったのである。

求馬は44歳（文政八年、1825）になって再び病が襲った。やはり胸がつかえ、頭痛がして、ふるえが止まらない。医者薬で腹痛を起こす始末で、はげしい下痢が続いた。十日苦しんで漸く落ち着いたのであった。その中でも求馬は自分の思想を表現した「敬天説」を著している。(④-113頁)

求馬は病気と著作活動とを、繰り返すような毎年をおくっている。腫れ物が出来て、出血する。一種の癌ではないかと言われて、大手術を試みている。今度は助からないだろうと思われて日が経過する。しかし今度も病の峠を何とか越えて、小康状態がやってきた。そこで心を落ち着け病を忘れるようにと、新しい書齋を造ることにした。

その書齋を「淡窓」と名づけて、移り住んだ。淡窓は「淡き窓」と、何ごとにも拘れられない心境であることを意味して、以後は「淡窓」と号した。塾生たちも以後は淡窓先生と呼称した。(④-121～122頁)

「淡窓」と号してからも、病の陰は付き纏った。56歳の時の大病は、淡窓に遂に「遺言」を書かせる程であったが、この時も天の助けがあつてか、命を拾ったのである。その後は次第に病から遠ざかり、淡窓をして初めて「安康をえたり」と喜ばせた。(④-123頁)

60歳代になると、淡窓は単に学者ではなくて、天下の偉大な師と見なされるようになった。そして長崎の大村藩や大分の府内藩に招かれて、政治改革論や海防論などを説いて廻った。(④-

124頁)

持病の悩みも60歳代には病患の中にも落ち着きを見せ、「万善簿」に善行記入に張り合いを感じている。かくて淡窓は安政3年(1856)、75歳で亡くなった。天敬の人を、門人や塾生は文玄先生と諡(おくりな)し、称えたという。(④-129~130頁)

まとめに代えて

以上、私はこの度、淡窓の経営した教育塾(咸宜園・桂林莊・咸宜園)の主な出来事と、その教育的運営に尽くした淡窓の生い立ちから青年時代に掛けての歩みに触れて、まとめてみた。

だが、「三奪の法」や「月旦評」、また学習方法としての「素読」や「輪読」や「奪席会」や「礼謁」等の説明と意味については次回に述べてみたい。淡窓の思想と学問についても膨大な著書を精読して捉えてみたい。塾生の生活を見事に捉えてた「桂林莊」の詩四首についても、その意味と情景の記述は次に回したいと思う。最後に教師淡窓の師弟間のエピソードについても(先に少しは触れたのであるが)さらに個々の塾生との熱い教育的交流についても、今後触れてみたいと思う。

(継続)